

小規模離島病院における内科系総合医による外科外来の試み

～総合診療医は整形内科を学べ！～

白石 吉彦

【目的】 隠岐島前病院（以下当院、44床）は島根半島の沖合約60km（フェリーで2時間半）の隠岐諸島に位置する。隠岐諸島の島前地区は人口約6000人、高齢化率約42%で、開業医はなく、医療機関は唯一入院機能を持つ当院と3つの国保診療所がある。2010年に大学派遣の腹部外科医が引き上げになり、全身麻酔、腰椎麻酔などの手術は中断を余儀なくされている。腹部外科医引き上げ後より外科外来は内科系総合医が行っている。領域にとらわれず、処置の必要な患者を外科外来で診療を行っている。当院の外科外来を受診する患者を分析することで、領域別専門医へのアクセスが悪い地域での処置が必要な疾病頻度と必要な処置の内容について明らかにする。

【方法】 2011年度1年間の外科外来を受診した患者のカルテから、初診再診の有無、病名、行った検査・処置などを調査した。同じ調査を2014年2月分について行った。また外来患者統計より外来患者数の増減の推移を示す。

【結果】 2011年度1年間の外科外来受診患者数は3,705名。初診再診ともに整形外科疾患が半数を占め、初診患者の診断名は上位から1位:腰痛症(9.3%),2位:湿疹・皮膚炎(8.2%),3位:肩関節周囲炎(6.2%),4位:変形性膝関節症(5.7%),5位:皮膚損傷を伴う外傷(5.1%)であった。初診患者1,404例中、1位:整形外科(53.1%),2位:皮膚科・形成外科(29.8%),3位:外科(4.0%),4位:耳鼻咽喉科(3.6%),5位:眼科(1.8%)。行った検査、処置に関しては、1位投薬,2位超音波検査,3位膝関節注射,4位肩滑液包注射,5位創傷処置であった。疾病傾向は変わらないものの2011年度には13.3%であった超音波検査の使用が、2014年2月には40.3%と激増している。また外科外来患者数も2009年度の2,903名から2014年度の5,005名へと増加している。

【考察】 2013年の国民生活調査で有訴率の1位腰痛、2位肩こり、3位手足の関節が痛むである。実際当院の処置系外来でも半数以上が整形疾患である。一方臨床医約30万人中整形外科医はわずか1.7万人である。当然、地方の小病院に整形外科の常勤医がいることはまれである。地域の総合診療医が運動器疾患を質の高いレベルで診ていく必要がある。例えば整形疾患の第2位にある肩関節周囲炎の治療は、当院の医師は全員、全例超音波下で肩峰下滑液包注射を行っている。総合診療医が地域で処置系外来を行うときには、当院で多用している外来超音波診療がその一つのカギとなると考えている。